

# 『伊藤整』の西欧文学文化の受容姿勢

2021年7月20日

澤井繁男

第1章 北海道生まれ、ということ

第2章 北海道文学の系譜と伊藤整の位置

第3章 「私小説」への問いかけ

第4章 「エゴ」の問題

第5章 西欧文学文化の受容

第6章 「性・愛」の表現の変化

# 1 北海道生まれ、ということ

- ・北海道を、内地（本州）の「植民地」という位置づけ。
- ・整が愛読し翻訳紹介（『ユリシーズ』）した、ジェイムズ・ジョイスがアイルランドで生まれて育ったので、グレートブリテン島（英国）を内地とすれば、ジョイスを「植民地」出身者として伊藤整自身と照合させている。

## 2 北海道文学の系譜と伊藤整の位置

### 2つの系譜（1）

- ・ 社会派：有島武郎—小林多喜二—島木健作—本庄陸男(むつお)—亀井勝一郎
- ・ 抒情派：国木田独歩—石川啄木—遠藤勝一（「林檎の花」）

### 2つの系譜（2）

- ・ 宗教派（プロテスタント）：有島武郎—島木健作
- ・ ロシア派（ Kommunismus ）：小林多喜二—島木健作—八木義徳

## 2 北海道文学の系譜と伊藤整の位置

### 伊藤整の位置

前スライドで示した、都合4つの分類のいずれにも該当しない。

『得能五郎の生活と意見』『得能物語』『鳴海仙吉』などから：3作とも戯作的、自己韜晦的、ひとを食ったような、批判精神に充ちた、細やかなことに拘った、「意見」を言う作品で、そのため風土性が欠落していて、それとはかけ離れた抽象的な場で作られている。

北海道の文学は「日本文学」とは幾分異なった、内地のひとにとってはエキゾチックな作品が散見されるので、折をみてご一読ください（もちろんアイヌのひとたちの作品も含みます）。伊藤整では、初期の『街と村』、戦時下の『得能五郎の生活と意見』、戦後の『鳴海仙吉』『若い詩人の肖像』『変容』がお勧めです。

### 3 「私小説」への問いかけ①

日本の文学の系譜を、日記、随筆、旅行記とみなして、身近のことを記述する作品が主流を占めるとする—「私小説」は、その流れを汲み、自己の自虐的告白、生活報告的性格を持つ。

真実を暴露しても世間（相手）への責任を気にしていない（花袋「蒲団」）。これは明治以降の日本に真の近代社会が成立しなかったがため。

- ・日本の私小説作家：貧困・愛欲・現世離脱による純化と俗人である自己との戦い
- ・プロレタリア文学の作家（労働者・無産階級者）：成功の見込みのない革命運動・検挙・拷問・裏切り・転向を繰り返す生活

### 3 「私小説」への問いかけ①

両者は「生活報告書」として、いずれも同じ水準の作品を書いたが、テーマが芸術性よりも、むしろ切実な人生そのものに起因していて、読者もそうした種類のものとして読んだ。

もちろん、両者とも「文壇」という閉鎖社会での出来事で、そこでのみ作品が成り立った。

ここに広津和郎の著名な「散文芸術の精神について」が意味を持つ—

「どんな事があってもめげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観せず、楽観もせず、生き通していく精神」。

この「精神」とは文壇ギルド内での「精神」を指す。

実社会でも通用しそうだが、ギルド内で純化され、言ってみれば「生活『道』」の世界にいたっていて、きわめて「求道的」で、実社会への配慮は不要。

俗世との戦いも和平もない、俗世を放棄して文壇という矮小な世界に逃げて来て、文壇内での対立や和平に甘んじている。

### 3 「私小説」への問いかけ②

西欧の近代社会は、自由主義の下、マルクス主義をも受容できるくらい成熟していた。

作家たちは当初から俗世間に身をおく「俗人」（=社会の一員）で、ゴシップ的なことは体裁上、作品化できない。

俗世から作品を練っていくので、作品「造型」が必須で、完成作品は3次元の「立方体」で奥行きがある。

その立方体のなかに「自己」を潜ませる

### 3 「私小説」への問いかけ③

鷗外も漱石も社会的地位のある人物で生活に不自由はなかった。

鷗外（独文学者）の本職は医師で、軍医総監（＝中将の位）まで出世。

漱石は東大教授で英文学者、後、朝日新聞で新聞連載作家として雇用され、高給取りだった。

2人ともゴシップは立ててはいけない立場にあった。

鷗外は医師仲間のせめぎ合い等の現実世界からやがて史伝（歴史）に生きる道を見出す。これは現実から身を引いて過去へと下り、他者のエゴをどうぞ、と言って通してやる、という一種の「断念」の心根がうかがえる。

漱石は、自己の内面を「立方体的」作品に納め、「調和」の必要を説く。それが晩年の「則天去私」を生む。これは「自分が運命として与えられた苦しみには忍耐して、自分のエゴをあまり強く主張しないで、他人と調和する」の意である。

## 4 「エゴ」の問題

伊藤整の文学の本質は「個我（エゴ）」への根強い問いかけである。社会主義や共産主義の世が来ても、エゴのなくなることはないから（現に、中国も北朝鮮などの共産主義国は1個人のエゴの発露が国を動かしている）、そうした社会体制には信を置いていない。このエゴは「生命と秩序」の相克・せめぎ合いによって端的に顕われるという。

- ・「生命」：秩序をつねに越えようとする。抵抗物が現われると生命力（エゴという根源的力）を発揮する（悪くいえば、エゴイズムだろうか）
- ・「秩序」：社会保全のために必要だが、極点まで生命を味わおうとする芸術の衝動はきまってそれに逆らう。

諸々の芸術家は己のエゴ（生命）の産物である作品を、同業者や評論家、それに一般のひとたちから認めてもらいたがっている、みな「愛情乞食」である。

## 5 西欧文学文化の受容

① 江戸時代：「和魂漢才」→幕末・明治以後：「和魂洋才」

② 伊藤整の視座

「世界の文化的な前線というべき地帯で起こった波が日本に伝わると、それは常に、日本文学と質を異にするものとして反発される。にもかかわらずそれは歪められ、引き戻された形で、やがて移される。日本文学の遅れている実質との照応においてそれ等を取り入れる準備や条件が紹介者自体にも、日本の文壇自体にもないところに起こる悲劇である」。つまり、都合のよい「効率的」なものだけを受容して「日本化」した。

③ 「新心理主義文学」の紹介

「時代をひとつ先行して文学を心理の世界に確立した大家にドストエフスキーとスタンダールとが居る。彼等は確信を以って現実の要素に選択を加えることと、信念に頼ることが出来た結果、性格上の特殊型を残して大をなした。だが、彼等の仕事といえども、写実精神に於いてはジョイスに一步譲らなければならず、細微さに於いてはプルウストに及ばないであろう。此処に我々の世紀の文学の驚異があると同時に、信仰に信念を失った我々の世紀のインテリゲンチアの急所があるのだ」。

## 6 「性・愛」の表現の変化

「性・愛」は伊藤整文学のもうひとつの核〔D.H.ロレンス作『チャタレイ夫人の恋人』の翻訳出版。ロレンスの影響下〕

- ・『鳴海仙吉』

「女は、ああいう顔と肉体を持って、そしてつまり、柔らかい粘膜の開いた肉体を持って居るから、だから愛などという曖昧な考え方が起きて来て、そこまで来ると問題の終末に来たような錯覚が起こるのではないか……その（女の愛）本体は貪欲な必死の執念で、そして……やさしい愛撫だとか、白い腹や股だとか、それから決定的には自分の秘密の内の粘膜の裂け目の陶醉の予感とそれへの恥らいなどに蔽われまぎらされて居るだけのものではないか」。

## 6 「性・愛」の表現の変化

「性・愛」は伊藤整文学のもうひとつの核〔D.H.ロレンス作『チャタレイ夫人の恋人』の翻訳出版。ロレンスの影響下〕

- ・『変容』

「愛というのは、執着という醜いものにつけた仮の、美しい嘘の呼び名かと、私はよく思います。……生きることの意味をさぐり味わっている人間は、その性においてもその反響を全人間的に受け取っている。生きる意味の把握があるところだけ性の感動の把握もあるのではないか……」。